

ユカギール語コリマ方言の名詞化辞=ben¹ -述部構成要素として用いられた際に見られる特徴-

長崎 郁

1.はじめに

ユカギール語²コリマ方言では、通常の動詞述部に替わって、動詞が名詞化辞=benをとり、さらに焦点標識あるいは助動詞を伴って述部として用いられることがある（名詞化辞は先行研究では bonと記録されている）。

- (1) túdel ſbiči-le ó:je-mele=bòd-ek³
彼 ミルク-ACC 飲む-OF.3SG=NOM-FOC
'He the milk who drank, or it is just the one that drank the milk' (Jochelson 1905:405)
- (2) xot kié-če=bon-pe-jo-d'emet ...?
どこから 来る-PTCPL=NOM-PL-である-2PL
'Where do you come from?' (Jochelson 1926:256)
[グロスは筆者による]

本稿では、このような名詞化辞=benを構成要素にふくむ述部について、その構造上の特徴、意味機能的な特徴について分析・考察する⁴。以下、具体的な例を見てゆくに先立ってまずは名詞化辞=benに関する

¹本研究は、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）「アムール・サハリン地区「危機に曝された」諸言語文化の調査と記録」（研究代表者：金子亨、課題番号：0941009）の援助による成果の一部である。

²ユカギール語はロシア連邦サハ共和国北東部、およびマガダン州北部で話されている言語であり、コリマ川下流域とアラゼヤ川、チュコチヤ川流域のツンドラ地帯で話されるツンドラ方言と、コリマ川上流域のタイガ地帯で話されるコリマ方言に大別される。この言語はいわゆる古アジア諸語の一つであり、近隣の諸言語との系統関係は未だ解明されていない。

³用例のグロスには以下の略号を用いる：ACC：対格、ALL：向格、FOC：焦点、GER：動名詞、IMP：命令法、LOC：場所格、NEG：否定辞、NOM：名詞化辞、OF：目的語焦点、PTCPL：分詞、PL：複数、SG：単数、1：1人称、2：2人称、3：3人称

⁴本稿で使用する主な資料は、マガダン州コリムスコエ村とセイムチャン村において Shadrina Agaf'ja Grigor'jevna 氏 (1921 年生)、Borisova Dar'ja Petrovna 氏 (1946 年生) の協力によって得られたものである。調査に御協力くださったお二人に改めて感謝申し上げたい。

表記は以下の音素による：短母音 i, e, a, o, u, ö. 長母音 i:, a:, o:, u:. 二重母音 ie, ue. 子音 p, b, t, d, t'(s'), d'(z'), k, g, ʃ, ʒ, x, ɣ, m, n, n', ɳ, l, l', w, j.

また、例 (1)(3) は Jochelson(1905) から、(2) は Jochelson(1926) から、(23)(24) はそれぞれ Jochelson(1900)、Nikolaeva(1989a) からの引用である。Jochelson(1900, 1905, 1926) からの引用の際には長母音以外、原文の表記に従い、長母音は母音上のバー(̄)で示されているものを、コロン(·)に替えた。Nikolaeva(1989) からの引用の際には、原文のキリル文字をラテン文字に転写し、また長母音については同一の母音を重ねて表記しているもの (VV) をコロン(·)に替えてある。

するこれまでの記述を概観することにしたい。

2. 名詞化辞=benに関する記述

名詞化辞=ben(bon)に関する記述は主に、Jochelson(1905)、Krejnovič(1958)に見られる。また、遠藤(1993)、Nikolaeva&Helimski(1997)でも断片的な記述がなされている。これらによると、まず、名詞化辞の前に現れる動詞は、A) 動名詞-(3a)、B) 分詞-(2)(3b)、C) 他動詞の目的語焦点の語尾-(1)(3c)、のいずれかの屈折形式をとり、名詞化された形式は、動詞の表す動作の主体、動作そのもの、あるいは動作の客体のいずれかに解釈される。ただし、動詞の三つの屈折形式がどのような条件で交替するのかという点や、名詞化された形式の指示対象がどのようにして解釈されるのかという点は、今のところ不明である。また、記述によっては=ben(bon)を接尾辞としているが、上記の動詞の三つの屈折形式はいずれも後続する名詞を修飾する機能をもつため、この要素は名詞修飾構造の主要部の位置に現れ、自立的な名詞と同様に扱われていると言える⁵。

- (3) a. met ó:je-l=bon
私 飲む- GER=NOM
b. met ó:je-ye=bon
私 飲む-PTCPL=NOM
c. met ó:je-me=bon
私 飲む-OF.1SG=NOM

‘my beverage, or the beverage that used to be mine’ (Jochelson 1905:405-406)

[グロスは筆者による]

先に述べたように、名詞化された形式が述部に用いられる場合、名詞化辞のうしろに焦点標識あるいは助動詞がつづく。両者のちがいについてはこれまでの記述では特に触れられていない。また、ユカギル語の述部は動詞語幹に人称語尾のような屈折形式がついてとじるのがごく普通であるが、このような通常の動詞述部に対して、動詞がいったん名詞化された上で述部となったものが全体としてどのような意味を示すのかという疑問が残る。

以上のような問題点をふまえた上で、次章では名詞化辞をふくむ述部の形式的な側面について、特に名詞化辞の前後に現れる要素に注目しながら見てゆくことにする。つづく4章ではこのような述部の表す意味的な特徴について述べることにする。

3. 名詞化辞=benを構成要素にふくむ述部の構造

まずははじめに、自動詞語幹が述部の先頭に現れるものについて見ると、語幹は分詞の屈折形式-j~-je~-d'e~-t'e⁶をとり、それに名詞化辞=benがついた後、焦点標識-lek~-k~-ekあるいは助動詞 yo:-~o:-

⁵Jochelson(1905:406)は、=ben(bon)と自立的に用いられる名詞 pon ‘something that is unknown’、ponpe ‘all household goods taken as a whole ...’(-peは名詞の複数性を示す接尾辞)との関係も指摘している。

⁶分詞標識のうち、-j~-jeは母音語幹の後につくが、-jと-jeの交替する条件は現在のところ分かっていない。-d'eは子音/l, l', n, n', r/で終わる語幹の後につく。-t'eは半母音/j/で終わる語幹の後に-jeがつ

がつづく。焦点標識と助動詞は主語の人物によって交替し、前者は主語が3人物の場合に、後者は主語が1、2人物の場合に現れる。助動詞は自動詞の主語焦点形の語尾をとる。また、分詞標識と名詞化辞はしばしば形の上で融合し、-jo:n(←-je+=ben)、-d'o:n(←-d'e+=ben)、-t'o:n(←-t'e+=ben)となる。このような融合は分詞標識のうち、-jに名詞化辞がついた場合には起こらないものと考えられる⁷。文中の主語の格は主格⁸(形態上無標)である。

(4) 自動詞 l'e- 「いる」

tudel	nume-ge	l'e-j=bed-ek ⁹
彼	家-LOC	いる-PTCPL=NOM-FOC
「彼は家にいた」		

(5) 自動詞 kel-~kie- 「来る」

met	kie-t'o:n	o:-d'e	「私は来た」
mit	kie-t'o:n	o:-d'i:li	「私たちは来た」
tet	kie-t'o:n	o:-d'ek	「あなたは来た」
tit	kie-t'o:n	o:-d'emet	「あなたたちは来た」
tudel	kie-t'o:d-ek		「彼(彼女)は来た」
tittel	kie-t'o:n-pe-k		「彼ら(彼女ら)は来た」

一方、他動詞語幹が述部の先頭に現れた場合、通常、語幹は目的語焦点の語尾をとり、それに名詞化辞がついた後、焦点標識がつづく。自動詞語幹の場合とは異なり、焦点標識に替わって助動詞が現れることはない。文中の主語と目的語の格について見ると、主語は常に主格であり、目的語は主語との人物の関係によって主格か対格(-le～-gele)をとる。下の例(6)のように主語が1、2人物で目的語が3人物のときには目的語は主格をとり、主語が3人物で目的語が3人物のときには対格をとる。このような主語と目的語の格標示のタイプは、通常の他動詞文のものと同じである。

(6) 他動詞 juo- 「見る」

met	töwke	juo-me=bed-ek	「私は犬を見た」
mit	töwke	juo-l=bed-ek	「私たちは犬を見た」
tet	töwke	juo-me=bed-ek	「あなたは犬を見た」
tit	töwke	juo-met=bed-ek	「あなたたちは犬を見た」
tudel	töwke-le	juo-me=bed-ek	「彼(彼女)は犬を見た」
tittel	töwke-le	juo-nile=bed-ek	「彼ら(彼女ら)は犬を見た」

き、/j-j/→/t'/という形態音韻論的な交替が起こった結果として現れると考えられる。また、子音語幹の一部には-t'eのつくものがあるが、その際、母音/u/が語幹と接尾辞の間に挿入されるものと異形態の語幹が現れるものがある—例(5)。

⁷また、例(2)(23)を含め、Jochelsonによる一連の著作に収められた資料には融合形の例は見られない(Jochelson 1900, 1905, 1926)。しかし、Nikolaeva(1989a, 1989b)に収録されたテキストには、筆者による資料と同様に融合形の例が多く見い出されることから、融合形の出現した時期は比較的最近のことと考えられる。

⁸ユカギール語の格についての定義は Nikolaeva&Helimski(1997)にしたがう。

⁹=benの末尾子音/n/は焦点標識の前で/d/にかわるが、その理由は分からぬ。

また、述部の先頭に現れた他動詞語幹が分詞の屈折形式をとった例が一例ではあるが得られている。下の例(7)では、「他動詞語幹+分詞標識」に名詞化辞がつき、その後に焦点標識がつづいている。同時にこの文では、名詞項の格標示のしかたが注目を引く。なぜなら、上述のように、他動詞文では主語と目的語がどちらも3人称である場合、目的語にあたる名詞項が対格をとることが予測されるのに対し、この文では二つの名詞項がいずれも主格となっているからである。

(7) 他動詞 a:-「作る」

tiŋ nume met et'ie a:-jo:d-ek
この 家 私 父 作る-PTCPL=NOM-FOC
「この家は私の父が建てた」

以上のように、述部内部で名詞化辞の前後に現れる要素の種類は、先頭にたつ動詞語幹の自他と主語の人称によって決まるものと考えられる。また、名詞化辞の前にくる屈折形式が、文の主語と目的語の格標示に影響を与える可能性がある。この点に関しては、(7)のように「他動詞語幹+分詞形+名詞化辞+焦点標識」となった用例をさらに収集し、検討する必要がある。

4. 名詞化辞=ben をふくむ述部の意味機能的特徴

名詞化辞=ben をふくむ述部には、過去における事態を示したり、強い断定を表すという意味的な特徴が見られる¹⁰。まずははじめに過去における事態を表す用例を以下に示す。

(8) tet tuda: xon-d'o:n o:-d'ek
あなた 以前に 行く-PCTPL=NOM である-2SG
「あなたは以前行った」

(9) tudel tuda: mi:d'i:-le xonrof-mele=bed-ek
彼 以前に 橋-ACC 壊す-OF.3SG=NOM-FOC
「彼は以前橋を壊した」

(10) met aduon n'egez'ie medi-me=bed-ek
私 それ 昨日 聞く-1SG=NOM-FOC
「私はそれを昨日聞いた」

(11) tuN kini:ge omo-s'o:d-ek
この 本 良い-PTCPL=NOM-FOC
「この本はおもしろかった」

(12) mi:d'i: tuda: xonro:-d'o:d-ek
橋 以前に 壊れている-PTCPL=NOM-FOC
「橋は以前壊れていた」

¹⁰Nikolaeva&Helimski(1997:165)には、-jo:n～-t'o:n～-d'o:n(同書では-jōn/-šōn/-žōnと記録されている)という形式を完了、過去完了と結び付けての記述がある。ただし、ここでは具体的な例が示されていない。また、この形式が分詞形の屈折形式と名詞化辞の融合したものとは見なされていないようである。

- (13) tuon xodimie-d'o:d-ek?

これ どのようにある-PTCPL=NOM-FOC
「これはどんな色だったか」

名詞化辞をふくむ述部が過去における事態を表す場合、その事態の起った時点は、発話時点からある程度、離れているものと考えられる。次の例(14)は民話テキストの一部であるが、語り手の説明によると、この文は行為がかなり以前に行われたことを表すという。また、この文に時を表す副詞 tuda:「以前に」を加えた(15a)は可能であるが、(15b)のように副詞 t'a:set「今」を加えることはできないという。

- (14) met tet-ul jalzil-va pessej-me=bed-ek

私 お前-ACC 湖-LOC 投げる-OF.1SG=NOM-FOC
「私はお前を湖に投げ込んだ」

- (15) a. met tuda: tet-ul jalzil-jin pessej-me=bed-ek

私 以前に お前-ACC 湖-ALL 投げる-OF.1SG=NOM-FOC
「私は以前にお前を湖に投げ込んだ」

- b. *met t'a:set tet-ul jalzil-jin pessej-me=bed-ek

私 今 お前-ACC 湖-ALL 投げる-OF.1SG=NOM-FOC
「私は今お前を湖に投げ込んだ」

しかし、過去における事態を述べる場合に名詞化辞をふくむ述部が義務的に用いられるわけではない。ユカギール語の動詞の時制には現在-過去(形態的に無標)と未来(-te)の二つがあるが、名詞化辞をふくむ述部は通常、現在-過去時制におかれた動詞述部との置き換えが可能である。

- (16) a. met tōwke juo-me=bed-ek

私 犬 見る-OF.1SG=NOM-FOC
「私は犬を見た」

- b. met tōwke juo

私 犬 見る(-1SG)
「私は犬を見た、私は犬を見る」

- (17) a. tudel nume-ge l'e-j=bed-ek (=4))

彼 家-LOC いる-PTCPL=NOM-FOC
「彼は家にいた」

- b. tudel nume-ge l'e-j

彼 家-LOC いる-3SG
「彼は家にいた、彼は家にいる」

しかし、現在-過去時制におかれた動詞述部は、名詞化辞を伴なう場合と異なり、発話時点から離れた過去における行為と発話時点の直前に行われた行為の両方を表すことができる。次例(18)を前述の(15)と比較されたい。

- (18) a. met tuda: tet-ul jalbil-pjin pessej
 私 以前に お前-ACC 湖-ALL 投げる (-1SG)
 「私は以前にお前を湖に投げ込んだ」
- b. met t'a;set tet-ul jalbil-pjin pessej
 私 今 お前-ACC 湖-ALL 投げる (-1SG)
 「私は今お前を湖に投げ込んだ」

ユカギール語話者からの聞き取りにおいて、名詞化辞をふくむ述部が用いられるのは、現在の事態を述べる文の後に、対応する過去の事態を述べる文を言ってもらったときや、文中に、tuda:「以前」、n'egez'ie「昨日」といった過去を指示する副詞句が含まれるときが多い。このようなことから、名詞化辞をふくむ述部を用いる場合には、事態が過去に起こったということを明示しようとする意図が働いているものと考えられる。

さらに、次例(19)-(21)のように、二つの連続した事態を述べる場合、名詞化辞をふくむ述部がより過去に起こった方に対して用いられることがあり、それによって、二つの事態の時間的な前後関係がより明確になる。

- (19) mit kelulke, met pulut nume-ge l'e-j=bed-ek
 私たち 来たとき 私 夫 家-LOC いる-PTCPL=NOM-FOC
 「私たちが来たとき、私の夫は家にいた」
- (20) sejrej-din l'e-j, sapadanil-pe jojno-j=bed-ek
 出ようとして いる-3SG ドア-PL 開いている-PTCPL=NOM-FOC
 「(彼は)出ようとした、ドアは開いていた」
- (21) tudel xon-din l'e-j=bed-ek, el xon
 彼 行こうとして いる-PTCPL=NOM-FOC NEG 行く (-3SG)
 「彼は行きたがっていたが、行かなかった」

強い断定を表わす例として、まず第一に次の(22a)が挙げられる。ここではいわゆる最上級の表現の中で名詞化辞をふくむ述部が用いられている。一方、(22b)の比較の表現の中では、名詞化辞をふくむ述部は用いられていない。

- (22) a. met sa:mij si:len-d'o:n o:-d'e.
 私 最も 力のある-PTCPL=NOM である-1SG
 「私は最も力が強い」
- b. met tet=tar si:len-d'e
 私 あなた=より 力のある-1SG
 「私はあなたよりも力が強い」

次の二つの例はそれぞれ Jochelson(1900)、Nikolaeva(1989a)に収められた民話のテキストの一部であり、(23)は、女が自分の寝床にいる夫以外の男を拒もうとする場面、(24)は、狐が熊をだまして銃を持った人間のいる場所へ連れて行こうとする場面である。いずれも、相手を説得するための根拠を述べる表現の中で名詞化辞をふくむ述部が用いられていることに注意されたい。

- (23) mojed'i mon-ni "met s̄oromon-d'e=bo-ŋo-d'e,
 女主人 言う-3SG 私 夫をもつ-PTCPL=NOM-である-1SG
 uorpe-t'orot'al-lanđan ot-xodo-d'ek."
 子供たちの側に CONJ-横になる-2SG
 「女主人が言った、私には 夫がいる、子供たちのいる方へ寝ればいいのに」
 (Jochelson 1900:141)

- (24) xa:xa:, tinla:wet lebejdi: ninge-j=bed-ek.
 おじいさん あっちの方に ベリー 多い-PTCPL=NOM-FOC
 xon-d'i:li tanjide.
 行く-1PL あちらへ
 「おじいさん、あっちの方にベリーが たくさんある、あっちへ行こう」
 (Nikolaeva 1989a:60)
 [グロスは筆者による]

以上のように、名詞化辞をともなう述部は「過去における事態」を表すために任意的に用いられたり、「強い断定」を伴なう表現で用いられたりする。これら二つの意味は全く異なったものではなく、どちらも話者が聞き手に対してある事態を動かし難い事実として伝えるという点で共通する。したがって、この形式は伝達内容に対する話者の認識を示すという、いわゆる法、あるいはムードとしての機能をもつと考えられる。

5.まとめ

本稿では、ユカギール語における「動詞語幹+屈折形式+名詞化辞=ben+焦点標識／助動詞」という述部の形式をひとつの単位としてとらえ、その内部構造と意味機能的な特徴について考察した。この形式内部では、名詞化辞の前後に現れる要素が述部先頭の動詞語幹の自他と主語の人称によって決定される。また形式全体としては「話者がある事態を動かし難い事実として伝える」という意味を示す。

参考文献

- 遠藤史 (1993) 『ユカギール語文法概説』 札幌: 北海道大学文学部言語学研究室
 Jochelson W. (1900) *Materialy po izucheniju jukagirskogo jazyka i fol'klora, sobrannye v Kolymskom okruse.* Sankt-Peterburg.
 Jochelson W. (1905) Essay on the grammar of the yukaghirs. *American Anthropologist* new series 7(2). 369–424.
 Jochelson W. (1926) *The Yukaghirs and the Yukaghirisized Tungus.* The Jesup North Pacific Expedition vol. 9, Memoirs of the American Museum of Natural History. E. J. Brill: Leiden.
 Krejnovič E. A. (1958) *Jukagirskij jazyk.* Moskow-Leningrad: Nauka.
 Krejnovič E. A. (1968) *Jukagirskij jazyk. Jazyki narodov SSSR* V. Leningrad: Nauka. 435–452. *Jazyki Azii i Afriki* III. 348–369.
 Nikolaeva I. A. (ed.) (1989a) *Fol'klor jukagirov Verkhnej Kolomyi I. Yakutsk.*

Nikolaeva I. A. (ed.) (1989b) *Fol'klor jukagirov Verkhnej Kolomy II*. Yakutsk.

Nikolaeva I. A. and Helimskij E.A. (1997) Jukagirskij jazyk. *Jazyki mira. Paleoaziatskie yazyki*. Moskow: INDRIK. 155–168.

(ながさき いく・千葉大学社会文化科学研究科)